

ある「愛の詩」

一人の若者が私に語ってくれた。

その若者は当時27歳。長男が誕生したばかりの時である。彼と同い年の妻との出会いから話が始まった。彼女、すなわち彼の妻は、彼の仕事上のお客さんの所で働く従業員からその人の妹を紹介され、その友達だった。それ故に、彼の結婚に至る怒濤の物語（ちょっと大袈裟かな）が始まる。

最初の出会いは、彼が若くして事業を立ち上げ、辞職後も会社員生活を送りながら同様の事業を続け、その事業の手伝いにその従業員の妹が、一人ではと彼女を連れて参加して来た。その事業での彼女の子ども達の対応に、彼は同志を得たと実感した。

その後、当然にその従業員の人から「妹はどうだった？」と問われる彼は、答えに窮した。紹介されたその人の妹は眼中になかったのである。

4か月後の年末、彼の小学校からの友人が毎年の恒例で彼のアパートに来た。彼は彼女との話を語るに、煮え切らない彼の話に彼の友達は、「今から電話して正月に彼女を紹介した友達を含め4人で食事をしようと言いな」と言ってきた。「えっ！」と我に返った彼は、友達の勢いに負け、仕方なく彼女に電話し、正月焼津の今は無き料亭で食事会を設けた。

事後、彼は益々彼女にのめり込んだ。同席した彼の友人も彼女を気に入り、翌日の夕方、「お前が今電話して今のお前の気持ちを告白しなかったら、俺が電話して告白するよ。」と言われ、慌てて彼女に電話して告白し、3日後に会う約束を取り付けた。

その後、逢瀬数回で彼らは唇を重ねたが、それ以上は躊躇した。しかし、彼ら愛の衝動は納まらない。営業職の彼の口八丁に搖さぶられ、惹かれていく娘の姿にいらだつ母親は、娘が夜遅くなても帰らないことから、彼のアパートに電話をする。「今すぐ帰しなさい」との彼女の母親から言われ、すぐさま彼女を家に送る。彼女の自宅に着くと、2月の寒い中、頭から冷水を浴びせられた。そんな姿を見て、娘を持つ母親の情念を感じた、と彼女は言ったという。

堪らなく、彼女はトランクを持って彼のアパートに来てしまう。同棲が始まった。何度も彼女の母親から電話がくるも、彼女の意思は変わらない。そんな彼女を見て、彼は父親に結婚同意書を書いて貰い、某所の教会での結婚式を申し込んだ。その日が、彼らの結婚記念日である。

居合わせた観光客からライスシャワーを浴び、彼らの結婚式が華やかに行われた。しかし式後、教会の神父さんに呼ばれ、式での彼女の涙の意味を問われた。神父さんに親の結婚の祝福を諭された。同日、宿泊先をキャンセルし、二人して彼女の実家に戻り、土下座をして結婚の許しを請うた。

結果、彼女の両親は、彼らの結婚の意思の固さに折れ、人を立てて結婚の段取りをする旨を告げ、婚約の運びとなった。彼女は実家に戻り、婚礼の支度に入った。

正月の席で彼は彼女の母親に、「あれはお前たちの気持ちを確かめたかった仕打ち。ごめんね。」と言われた、とのこと。子を想う親の姿を実感した話だった。